

## 審査の結果の要旨

論文提出者氏名 ワッシュ イバノビック グレン

人は都市内のさまざまな“場所（プレイス）”を体験しながら生活しているが、“場所”はどのように認識され、どのような階層構造をもっているであろうか。本論文は、それらを実際の“場所”において確認し、その構成を実証的に明らかにする試みである。

分析の対象としたのは東京都台東区の上野公園である。上野公園には、美術館、博物館、コンサートホール、動物園、社寺といったさまざまな公共施設が集積していて、それらの複合体としてひとつのエリアが形成されている。地形的には上野台と不忍池からなり、歴史的には3代将軍の家光が寛永寺を建立した時点まで遡ることができる。歴史やイベントがさまざまに重層した空間であるが、その内部はいくつかのサブプレイスに分割できる。サブプレイスの境界は塀や柵などで明示的に示されるものの他に、縁石や仕上げの相違等により暗示的に示されるものもある。公園全体から、塀や柵で明示的に囲われた領域を除いた、誰でもが自由に入出りできる領域に対して、空間的なまとまりやその用途に基づいて領域区分をおこなうと33のサブプレイスが抽出できる。これらのサブプレイスの状況と相互の関係性を読み解いて、公園全体がどのような組成になっているのかを推察しようというのであるが、その際に手がかりとなるのが、“Architectonic Elements”と、“Visual Scenery”、“Activity”の3要因である。“Architectonic Elements”というのは、公園内部にあるフィジカルな設えで、ベンチやモニュメント、柵やサイン、舗装の仕上げといったもので、大きく12のカテゴリーからなり、それらはさらに85の項目に細分化される。各サブプレイスにおいてこれらの項目の有無や個数を調べている。“Visual Scenery”というのは、各サブプレイスの代表的な“場所”に立った時に、視界に何が見えているのかを、連続写真をつないで作ったパノラマ写真から測定したもので、地面や空、植栽、建物などの11のカテゴリーについて面積比が算出してある。“Activity”というのは、サブプレイスがどのように活性化しているかを人々の集まりの状況から判断しようとするもので、具体的には、ある時間帯にその場所に滞在あるいは通過した人数として計測している。これら3つの示標を基に、サブプレイスの特性を記述し、それらの類似性をクラスター分析により調べ、階層化している。

本論文は、第1章～第7章、および Appendix 3 編からなる。

第1章では、研究の背景と目的について述べ、論文の構成について簡単に説明している。

第2章では、チリのアントファガスタにある日本庭園における筆者自身の幼児期の体験について述べ、“場所”に対する研究を始めた動機について語っている。

第3章では、“場所”に関するさまざまな分野における研究を概観した後に、建築あるいは都市の分野に表れる“場所”の特性と既往研究についてまとめている。

第4章では、研究を遂行するにあたり、全体的なダイアグラムとそのフレームとなる3つの要因について説明している。

第5章からが上野公園を舞台にしたケーススタディである。まず、サブプレースをケビン・リンチの『都市のイメージ』の5つの概念に沿って決定するプロセスについて解説している。特に、境界の決定方法について詳しく説明し、33のサブプレースを確定している。次いで、“Architectonic Elements”の12のカテゴリーに含まれる内容の具体的な説明と調査結果が示されている。また、“Visual Scenery”について測定方法を説明し、各サブプレースにおける測定結果が示されている。更に、上野公園にある公共施設の概要の説明に引き続き、“Activity”の計測方法と表示方法について解説している。

第6章では、“Architectonic Elements”と“Visual Scenery”、“Activity”の3要因がもつ103の変数に対して、要因別に、また、全ての要因をまとめたものに対してクラスター分析（ウォード法）を適用し、その結果を樹形図で示している。これらの分析を踏まえて、33のサブプレースについて、それぞれの境界の特性と3つの要因の内容を詳細に記述している。

第7章は結論で、3つの要因のそれぞれのクラスタリングの状況と、全ての要因に対するクラスタリングの結果が述べられ、これら3つの要因が“場所”を記述する上で有効に機能して、上野公園の組成を明らかにするのに役立つことを確認している。最後に研究の将来的な展開について述べている。

Appendix Aは、サブプレースにおける、“Architectonic Elements”と“Visual Scenery”の原データである。Appendix Bは、サブプレースにおける時間帯別の“Activity”の状況を示す活動等高線図である。また、Appendix Cは、クラスター分析で用いた生データの一覧である。

以上要するに、本論文は、都市空間における“場所”がどのように認識され、階層化されているかを、計測可能な事象に着目して分析したもので、我々が意識の総体として無意識のうちに判断しているサブプレースの相違を科学的な手続きの基に顕在化させたものである。いくつかのサブプレースが複合すると、より大きな“場所”が形成されるが、個々のサブプレースと全体との関係性を記述する手法はこれまで存在しなかった。本研究は、それを解明するいとぐちになるもので、地域を読み解く有力なツールが得られたものと判断する。物理的な環境とそこでの人々の振るまいとを結びつけて“場所”を規定するこの手法は、公園に限らず、さまざまな場所において適用可能で、極めて汎用性が高いものである。これは都市・建築計画学の分野に新たな分析方法を導入するものであり、施設の付加や将来予測において現実に即した方向性を与えるものとして、その意義は極めて大きい。

よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。